

I'm home.

七原ハルコ

バスは停まった。アイドリングの振動が昔から彼女は苦手で、逃れるようにステップを降りた。アスファルトからのぼせあがる熱が、少しの眩暈を起こさせる。ぬるい風が彼女の横を通り抜けた。バスは行き過ぎた。

履き古した華奢な靴のかかとは、内股気味に歩く癖のせいで、斜めに削れてしまっている。そうでなくても彼女はふらふらと、よろけるように歩いた。

藤の蔦をからませたバス停の屋根。陰に入ると少しだけ涼しくなる。風で木々が葉を揺らす。彼女は歩く。慣れた道だ。道沿いに作られた、ガードレール代わりの花壇に濃いピンク色の花が咲いている。それらも風と共に揺れる。ほのかな甘い香りがした。それがなんとという花なのか、彼女は名前を知らなかった。歩き慣れた道だった。思い出したかのように、ぼつりぼつりと立つ街灯を、ひとつ、ふたつ、と数えながら彼女は歩いた。夜になればそれ以外に光源がないせいで、とても暗く、彼女の友人たちは通るのを

嫌ったものだ。通りを抜け、角を曲がり細い坂道を下る。突き当りで右に行けば彼女の家だ。

隣の、黒い屋根の家から、ピアノが聞こえてきた。クーブランの墓の第三楽章。本当に昔、学校から帰るころにはめちやくちやな猫ふんじやったしか聞こえなかったことを彼女は思い出していた。一人娘のゆきちゃん、もう高校生になるころだ。おねえちゃんおねえちゃんと、随分慕って来ていたことも思い出されて、自然、笑顔になった。

玄関前の庇の下で、彼女は右足のつま先を三回、とんとんとんと、と鳴らした。指をドアホンの黒いボタンにかけたところで、扉が開いた。スーツ姿の男性が出てきた。伸びた前髪の隙間から、黒々とした瞳が覗く。

「ただいま」

右手を軽く挙げて、彼女は言った。言われた男は左手に持った細い木の棒のような束とホロー皿にちらりと目をやって、おかえり、と答えた。彼女の兄だった。

家の中は、一見するかぎり彼女が最後に出ていった時からあまり変わらないようだった。兄は自分ばかりアイスコ

ーヒーの入ったタンブラーを用意して、ソファに座って飲み始めた。ひどいと言えば自分で用意しろと一蹴されてしまった。何となくそのとおりに動くのも癪な気がしたから、彼女は兄から少し離れてL字型に配置されたソファに座りこんだ。薄型のテレビが映すのは高校野球で、ルールもろくにわからない彼女にとっては面白がるものではなかった。兄にとつても特別興味を引くわけでもないらしく、文庫本のページをばらばらと捲り、どこまで読み進めたのか確かめている。空いた窓からは相変わらず、隣の家のピアノの音がかすかに聞こえてきていたし、蟬の鳴く音も聞こえていた。彼女はしばしテレビの画面に映る女の子たちや、兄のグラスについた水滴がくつきあつて大きくなるのを眺めていたが、静かに読書をする兄の姿と、時折興奮したように叫ぶアナウンサーの声とがあまりに似つかわしくないと、リモコンに手を伸ばした。応援のブラスバンドが丁度、ウィーウィルロックキューを演奏しだした。兄のために、彼女は音量のマイナスから電源に指を移し、押した。兄はちらりと消えた音の理由を目にとめて、再び本に視線を落とした。下手に造作の整っているせいで、そ

の表情の冷淡さばかりが強調されるのが彼だった。これが兄妹でなければ怒っているのではないかと不安になったに違いない、と彼女は思った。

静かだった。時折聞こえる紙を捲る音の他は。いつしかピアノの音はやんでしまっていて、蟬たちも示し合わせたかのように時折びたりと鳴くのをやめるものだから、その切れ切れの静寂に、彼女は不安を感じた。風が吹いた。クリーム色のカーテンが揺れ、兄の長めの前髪が乱されるのを彼女はじつと眺めていた。ふと兄が立ち上がって、出かけてくると言う。引き抜かれたネクタイのしゅるりという音が聞こえた。摩擦で、首元は熱をもつのかしら、と兄の背中を見ながら彼女は思った。二階に上がっていく姿を確認して、少しだけ兄のコーヒーを飲んだ。シロップもミルクも入っていない液体はただただ苦かった。

彼女は自分の部屋のベッドに横たわって、天井を眺めていた。一切の明かりをなくしてしまわないと眠れないのが彼女の性質だった。幼いころはあの木目を繋いで、居もしないおそろしいものにおびえては眠れなくなったことを

彼女は思い出していた。そして父と母の寝室に行つて、布団と布団の間に寝かせてもらつていたことも。五つ歳の離れた兄を頼ることもあつたが、寝ぼけているときの寝かせてくれと訴える表情のほうが想像上のおぼけよりも恐ろしかったから、稀なことだつたと思う。

表で車の停まる音がした。カーテンの隙間から、明かりが侵入してきた。光は壁を舐めるように動いては隅のほうで消えてしまった。彼女は腹にかけたタオルケットをのどもとまで引き上げて、体を丸める。夜中寝ていたら部屋にお化けが入つてきて、布団から体を出しているとそこを大きなハサミでちよん切つてしまふんだつて、と小学校で友人の怪談を聞いた日の夜よりも真剣に、彼女は体を折りたたんで、小さくしようとした。

「暑いのに何やってんだお前」

「そんな物騒なバケモノがいたらもつとニュースになつてるよ」

「クーラー切るか布団剥ぐかどつちかにしろ」

幼い頃は馬鹿らしい怪談であつても疑うことはなかったから、数カ月後つけっぱなしだつた冷房を切りに入つて

きた兄に否定されるまで彼女の努力は続き、もはや寝るときの癖になつてしまつたのだ。

彼女は夜が嫌いだった。その日したことが否応なしに思い出されるからだ。いいことも沢山あつたはずなのに、なぜか失敗したことや、上手くいかなかつたこと、時間を無駄にしたことばかりを思い出すからだ。中学時代が特にひどく、何の理由もないのに急に叫びだしたくなつたり、ひどい焦燥感で頭が冴えて眠れなくなつたり、自分の体がやけに気に入らなくて、太もものあたりを何度もつねつてみたりした。そういうときに部屋の外に出ると、兄の部屋からは起きている気配が伝わってきたものだった。シャープペンシルの音、椅子を引くかすかな音。それらが彼女の心を不思議と落ち着かせた。

いつしか彼女は眠りに落ちていた。カーテンから漏れ出した明かりが彼女の肌の上をすべつていった。

カーテンを開ければ眩しかった。一階に下りても、兄は居なかった。食器棚に置かれた陶器の小物入れの中に、彼の鍵が無かった。仕事に行っているのだろう。彼女は冷蔵庫

庫の中で冷えている麦茶を、ピンクの水玉が描かれたタンブラーに入れて、そして飲み干した。そして裸足をぺたぺたと鳴らしながら、自分の部屋に戻った。ベッドに飛び込んで、レースのカーテン越しに青い空を見た。積乱雲の形を眺めているうちに、再び眠たくなっていた。

眠りはごく浅かった。でこぼこだらけの道を進む車の中でうたた寝をするがごとく、何度も目を覚ましては、また瞼の重さに抗えずに目を閉じて、また何のきっかけもなく起きてを繰り返した。夢を見ていたような気もするし、見ていなかったような気もする。ただ一度、窓の外で、バスが空を駆けるのを見た。タイヤもくるくると動いているのだが、窓から何本もの櫂が伸びて、青い空をかいてのろのろと進むのだ。なんとも馬鹿馬鹿しい夢を見ている。彼女は口の中が異様に乾いていることに気が付き、つばを飲み込んで、もう一度瞼を下ろした。

階下からの声に目を開けたときには、部屋の中は真っ暗になってしまっていて、彼女はベッドを降りて、手を前に突き出して暗闇の中を歩いた。階段を下りると、兄と、幼

馴染の樹がソファに座って酒を飲んでいいる。樹と最後に会ったのはいつだったのか彼女は思い出せなかったが、記憶の中の彼よりもずいぶん大人びて見えた。

「いつき」

呼びかけてみたが返事はなかった。声が小さかったのだろうか。もう一度、いつき、久しぶり、と言ってみると、兄が顔をこちらに向けもせずにソファの自分の横を右手でぼんぼんと叩く。彼女はそれに従って、示された先に座った。

「久々に来たよ、こっちは」

「本当だよ。薄情者め」

彼女はふざけるようにそう言った。二人は気にもしない。彼女の兄は樹に語りかけた。

「あそこのさ、バスケットコートがあった広場が」

「見た。タイムパーキングになってやんの。すっごい切なくなつたよ俺さ」

はは、と笑って、樹は缶ビールを呷った。ふと樹と目が合った。彼女は笑いかけた。樹は手元に視線を落として、薄く笑った。昔からこの同級生の幼馴染は、変なところが

照れ屋なのだった。

「……おばさん達、元気にしてるか」

「そりゃあ。恭兄んとこ行くって言ったらすごい悔しそうにしてたよ」

お袋、恭兄のファンだからさ、と言う。その「きょうにい」という呼び方が、あまりに昔と同じだったことに彼女は笑った。樹は立ち上がると、和室の方に向かった。

「入っていい？」

「もちろん」

そう兄が答え、樹は襖を開けた。兄はビールを一口飲んで、そして恭兄ライター、という樹の声に立ち上がった。ふと頭が重たく痛み出したのに彼女は気づいた。きつと寝すぎたせいだ。体中が重いのも、単に眠りすぎたのだ。睡眠は案外体力がいるものらしい。

「明日帰るのか」

「そうなんだよ、仕方ないけどさ、もっとこっちに居たかったな。俺ね、朝、海に行こうと思ってる」

「懐かしいな、毎年三人で行ったよね、海」

彼女が言うと、樹は頷いて、真菜が転んで額切ったこと

あったよな、と言った。やめてよ、と言おうとした声は、兄の発言とぶつかったためひっこめた。

「新しい水着買ってもらったからってはいやいな、あいっ」

「痛くないーって言いながら泣いてたよな、確か」

「だって、痛いって言うより、びっくりしたんだもん」

「俺さ、頭ってたくさん血が出るって知らなかったからすっげーびっくりしたよ」

「俺もだよ」

ちーん、と鈴の音がして、二人はソファに戻ってきた。樹はにこにこしていた。精悍さを増しているも、笑うと目元に愛嬌がある。彼女は樹の笑顔を気に入っていた。しかし、そんなに笑うなど少し不機嫌にもなった。横目でにらみつけながら、樹がソファに座ると同時にふん、と顔を背けてやった。こういう仕草を見ると樹はひどくうろたえて、懸命に彼女の機嫌を元に戻そうと苦心する。兄はそれを微笑ましいことだと、少し離れたところから眺めている。それがこの三人の常だった。

「俺はお前とも兄弟になりたかったよ」

そう、兄がぼつりと呟くのを耳で聞いて、彼女は背けた顔を再び二人に向けた。樹は笑っていた。ほんの少しさびしきでもあった。

樹が帰ってしまった後で、兄と妹、二人でしんみりとトランプ遊びをしていた。テレビから流れる大げさな笑い声をBGMにして。二人でするババ抜きに面白さな笑い声はしなかった。それでも二人は札遊びを続けた。

「今日ね、バスが空を飛ぶ夢を見たの」

「へえ」

そう兄は淡泊な返事を返した。

「なかなか私ってイマジネーションがあると思わない」

「そうかな」

そう兄が言うのと同時に引き抜いたジョーカーで、彼女は、あ、と声を上げた。

「ババ抜きつまんないよ」

「お前が始めたのに」

器用にジョーカーをよけて、兄はテーブルの上に札を二枚捨てた。

「今度はUNOだ。UNOにしよう」

「二人で。シュールだなあ」

「いいでしょ、たまには付き合ってよ」

彼女も二枚札をテーブルに置いた。手持ちの札をシャッフルして、扇状に広げる。兄は右から左へ手を彷徨わせながら、ババとは離れたスペードの四を引いた。

「お前相手に負ける気がしないよ」

「何だと」

「去年はなんで帰らなかった」

彼女は膝のクッションに肘でぎゅっと力を込めて、さあ何でだろ、と答えた。嘘ではなかった。彼女は、去年は帰省していないということにさえ無自覚であったからだ。

「何か、用事があったんだっけな、たぶんだけど」

「俺さ、親父の髭刺ったんだよ、この前」

他人の髭を剃るなんて初めてでさ、と兄は常の熱のこもらない声で言った。そして缶ビールを一口飲んで、手の中の札を彼女に向けた。

「それで？」

彼女は一枚札を抜き取る。スペードの五。ペアになるハ

トの五も抜き取って、テーブルに捨てた。

「手元が狂って、変に傷とか付くのは嫌で、すごく緊張したんだ。冷たくて、重くて」

兄はテレビの中で歌っているお笑い芸人にふと目をやっつてから、彼女の顔を見た。自分がしでかした、何か大きな失敗に気付いたかのような表情を浮かべた後で、兄は視線を逸らす。しかしその様子を見ることもなく、妹は残り少なくなつた札を混ぜるのに必死になっている。もともと彼の表情はさほど雄弁でもないのだ。

「……そういうことがあって」

そう彼が仕切りなおしたときには、その調子は平生と変わりなかった。彼女がその変化を発見するはずもない。

「すごく疲れたんだって、愚痴れる相手が、お前が居たらよかつたのにと思つたんだ」

「ふうん？」

もう少し注意深く彼女が兄の顔を眺めていたら、その揺れる黒い瞳に気付いていたのかもしれない。しかし、彼女は、兄に抜き取られたカードに気を移した。自分の負けについて不平を漏らす彼女に兄は静かに笑つた。

死んだ後でも、心臓が止まった後でも、どうして髭が伸びるのだろうか、力の入ることのない父親の頭を膝に置きながら兄が考えたのは、一年前の夏のことだった。

触れる肌はひんやりとしていた。覚えがあつた。腕をつかんで、胸の上においてやつたあとで、ひどく重いものだと彼は思った。実際の重さなどはどうでもよいことだった。彼の父の遺体は何キログラムで、右腕を動かすのにかかる力の量はどれくらいか、などは何の意味も持ちえない。ただ冷たさには重みがあると、彼が気付いたのはそれなのだった。金属の冷たさなどにはない深さのある質量を感じたこと、ひとりということに自覚的になつた凍えていく彼の心と、そこにいない妹。それが全てだった。彼は妹が知るはずもなく、知る必要のないことをしまいこんだ。ぎゅうぎゅうに閉じ込めた後で鍵をかけて、さらに蹴飛ばして遠ざけることにした。それだけだった。

次の日も彼女はうつらうつらとしながら日中を過ごした。さすがに目の高くなつた昼には起きだして、冷蔵庫の中の麦茶をコップに移して、ソファに座りこんで飲み干し

た。窓を開けると涼しい風が入ってきた。隣のゆきちちゃん  
は今日もピアノを弾いている。クープランの墓の、今度は  
第一楽章だ。カーテンはめくれあがり、壁にかかったカレ  
ンダーがばさばさと音を立てた。彼女の長い髪は肩にかか  
ったまま、動かなかった。彼女はテーブルの上に、兄が読  
んでいた本を見つけて、ぱらぱらと捲った。短編小説をま  
とめたものようだった。

適当に開いたページを読み進めた後で、どこか知ってい  
る話だと思った。しかし本のタイトルを見直してみても、  
聞き覚えがなかった。裏表紙の解説文には傑作ミステリ、  
と書いてあり、自分から手に取るはずがないなど彼女は思  
った。SFだとかミステリの類は、彼女が好むものではな  
かった。

そのまま話を読み進めて、灯台に向かって恐竜が吼える  
場面になって、ああこれを昔、何かの少女漫画で読んだの  
だ、と彼女は気が付いた。たしか美容室に置いてあった単  
行本だ。

「それはあまりにも孤独なので」。頭の中でその一説を声  
にしてみる。体にピンと一本、筋が伸びるような気さえし

た。美しい物語。恋しい相手に、会いに来る、ひとではな  
いもの。

ふと目を移したテーブルの上のガラス皿に、リンゴが剥  
いてあった。ウサギの耳の形に残された赤が目に焼き付く  
ようで、彼女は手を伸ばして、一口かじった。途端頭が痛  
くなった。特に首元が、焼けるように痛んだ。目を閉じる。  
テレビのチャンネルを、いたずらにザッピングするかのよ  
うに、様々なことが、頭の中に浮かんで消えていった。  
リンゴ、赤、街灯と、毒々しいくらい鮮やかなピンクの花、  
バックプリントの絵柄が気に入って買ったTシャツを着  
た、自分の背中。

這うようにトイレに行った。全てもどしたあとで、不思  
議と頭痛は消えて、何が思い浮かんだかも忘れてしまった。  
彼女は自分の部屋に戻った。ベッドに横たわり、体を丸  
めた。できるかぎり体を丸めて、小さくしようとした。  
窓の外では、バスが空を飛んでいる。窓から伸びた無数  
の権が青空をかき、悠々と雲の中に消えていった。

目が覚めたとき、まだ外は暗かった。だんだんと白んで



いく空をぼんやりと見つめながら、彼女は何一つとして考  
えてはいなかった。体が先ほどから、震えて止まなかった。

彼女はバスが好きではなかった。遠足に行くたびに酔っ  
てしまつて、菓を飲んでもろくに効かなかった。タイヤの  
上の席は揺れるからやめろだとか、横を向くな本を読むな  
ガムでも噛んでおけ、とか、アドバイスをくれたのは兄だ  
った。樹の隣に座つて、気楽に過ぐすのがいいとも。

彼女は起きだして、兄の部屋の前に立った。ドアノブを  
ゆつくりと回す。鍵はかかつていなかった。

窓の外から入る朝日が、網膜に焼き付いて、瞬きをして  
も残像が消えなかった。

「お兄ちゃん」

そう息を吐くついでのような声で呼ぶと、兄はすぐに目  
を開けた。妹の声に兄は敏感だった。

「私、帰るね。帰らないと」

兄は半身を起こして、頭をかいた。わかった、と掠れた  
声が返るのに時間はかからなかった。

手早く身支度を整えた兄と、一緒にバス停まで歩いた。

空は白いままで、少し肌寒いくらいだった。何の荷物も持  
たず、彼女は無言で歩いた。なぜ帰らなくてはいけないの  
か、彼女に論理だった説明はできなかった。ただ帰らなく  
てはいけないから、こうやって帰るのだ。どこ行きの、何  
時発のバスに乗るのかも知らないまま、ただ、バスに乗ら  
なくてはいけない気がするから、彼女は歩く。兄は黙つて、  
半歩後ろをついてくる。歩幅を狭くしながら、ゆつくりと  
足を運んでいる。二つのベンチが並ぶバス停にたどり着い  
て、ようやく彼女は口を開いた。

「さよなら」

「また帰ってこいよ」

今度は誰かと一緒に、と兄は言つて、妹は首をかしげた。

「どうでもいいや、一人でもいい。ただいま、って何度で  
も帰ってこいよ」

兄はいつになく饒舌だった。

「お前、なんで俺のどこに来るんだろうな、今度は樹のと  
ころにでも行つてやれよ」

「いつき？」

「好きだったら、あいつのこと」

そうだったのかしら、と思いつながら彼女はベンチに座った。兄はあまり分かっていない様子の妹の顔を見ながら、笑った。

「それじゃ」

そう言つて、彼は元来た道を帰つていった。彼女は手を振つた。兄は振り向かず、右手を挙げて答えた。

バスは程なくして着いた。

日が落ちて、兄は家の玄関の前に、ホーローの皿を置いた。おがらを置いて、ライターで火をつけた。何でそうするのか、幼いころ、まだ元氣だった母に聞いたことがあるが、そういうものだから、としか言われなかった。

さびしいんだと叫びたくなる気持ちにはもう蓋をしてしまった。帰るな、とすがりつきたくなる腕もしまいこんだ。鍵をかける。それだけ。そういうものだから。

煙が目に入って痛かった。少し涙がにじんだが、こぼれてしまうほどには出なかった。

そうしたら、また来年会えるのだろうか。何も知らないまま、ただいまと帰ってくるのだろうか。だから何も言わない。

教えない。それだけ、それだけだ。

おかえり、と言つて迎える。今までと同じ、五年間同じ。

会いたい。

それだけ。

煙は白い線になつて、たなびきながら、少しずつ空へと伸びていった。

月刊缶じうす7月号 通巻181号  
2012年6月26日発行

編集人 森要 蒼井天優

発行所 広島大学文団BOX